

友白髪

泉鏡花作

全一編

「奇妙、喜多八、何と汝のやうなものでも、年に一度ぐらゐは柄にない智慧を出すから、ものは不思議よ。然し春早々だから、縁起だ、今年は南瓜が當るかな、しかし己も彌次郎、二ツあつた友白髪、一ツはまんまと汝に功名をされたけれども、あとの一ツは立派に負けねえやうに目覺しく使つて見せる。」

と、道中二日三日、彌次は口癖のやうに言つた。

此の友白髪と言ふのは、元旦、函嶺で手に入れたものであるが、谷を探り、山を獵つて、山姥の頭から取り得たなど、言ふのではない。去年大晦日の晩方、塔の澤に着いて、環翠樓に宿つて、座敷へ通ると、案内をした女と入交つて、受持の姐さんが、火と鐵瓶を持つて來たのに、彌次が眞先に酒を命じて、温泉から上る、直ぐに銚子が、食卓の上へ袴で罷出るといふ寸法。彌次、

「切先づ氣つけにありついた。其處で、姉さん、

此の樓は酌をしてくれるか何うだ。「女中、

「いたしますとも。」彌次、

「いや、いたしますは分つたが、酌も對酌、大晦日には響が悪いが、酌もしてくれる、盃も受けてくれるといふのでなければ嬉くねえ、何うだ。何、御念には及ばんと。及ぶ、大に及ぶよ。昨夜は酒匂の松濤園で、古今情ない目に遭つた、聞いてくれ、家の掟とあつてな、唯酒は注ぐ眞似をしようとつても、盃に手を出さぬ。何か其の女の親仁は、酒に取殺されたとでもいふ事だらうよ。又、汝の前だが高い酒を斷つて飲ませたいといふのハルビ法はないが、指した盃を、拂かれては酔へません。其處で今夜ははじめから條約を取極めるだ、ふむ、いくらでも頂く。いや餘り頂くな、酒が減る。酒は減るが、扨、受けるとは嬉しいな、しかし、一ツ受けて直ぐに遁げるか。何、遁げぬ。や、然らば慮外ながら祝儀に及ばう。」こゝで當世の折靴ぐらゐは、大さのある中挟の懐中ものから、ト半紙を引出すことあつて、悠然として美人の膝の邊に押遣る、作戰計畫圖に當つて、女中外して去る事能はず。其晩十二時頃まで

酒席に侍つたが、翌日は元日といふのに、嘸忙がしくもあつたらう、其の迷惑察すべしであつたが、彌次、後密かに喜多に囁いて

「あの、罪造り、厄落をさせて遣つた。」其の夜は酒が發奮んだので、彌次呻るほどに、けるほどに、一時過ぎて潜り込んだ蒲團の中で。とろけて消えさうな大生酔。喜多八は未だ少いだけ、大晦日は大晦日、元朝は元朝と知つて心を動かすと雖も、彌次は元日を月の七八日ほどにも思はず、初空といふに0報い0顔へ/ルビの二日酔。ふら／＼と湯に入り、嗽とニを一所にして、つろりとした法然0天窓に置手拭で座敷に歸り、行儀よく坐つた喜多八と差向ふ。喜多、更まつて、

「お目出たう」と挨拶をする、彌次、
「をどかし 嚇 なさんない。」廊下を靜に朝風を通して、
明放しの障子の外で、三ツ組の盃臺と、雌蝶雄蝶を美しく飾つた、銚子を兩手に、小女に、膳を持たせて、窈窕たる哉中年増。しとやかに手を支へて、

「あけましてお目出度うございます。」
と折目正しく會釋する。

此の人、昨夜の新造とは風采がらりと異なり、渠は、

唐縮緬の帯、黒孺子の襟で、赤大名といふ扮装。島田をがツくりとさせて、腕の白きを仄めかし、裳の紅を蹴出したが、是は、丸鬘に、龜甲の突通し、衣紋正しく、お納戸地に質な小紋の三ツ紋附、黒孺子の丸帯をお太鼓にキチンと占めて、内端に少し背を屈めて、黄金の目の白魚を、しなやかに支いた風情。彌次郎、天窓の手拭を取つて、固く、

「はい、／＼。」女中、

「ほんのお記しばかりでございますが、お祝ひ申しまして故とお屠蘇を。」彌次は、

「はい、はい。」女中、

「何うぞ召上つて下さいまし。直ぐお燗酒にいたします。」彌次、喜多、

「はい、はい。」即ち素直に屠蘇を受けて、扱、お肴は何々ぞ。巻するめ、より昆布、勝栗、煮豆などある中に、小皿に盛りて、別に小0殿原ハ／ルビと、葱の美しく細い、根のふさ／＼と附いたまゝ長三寸ばかりにして、白い處ばかりたのを二本づゝ添へてあつた。此のごまめ、の其の厳しさ、小0殿原ハ／ルビとは覺えたが、

「葱はこれは何ぢやろ」と、彌次が不審の

に女中が答へて、

「あの、其は友白髪でございます。」と言つた。

友白髪はこれである。

「氣に入つた、難有い、是非一ツ話のたねに持歸らう。」

「そんなものを貴下、」と女中がしほらしく、極を悪がるのを、彌次、うんにや構はぬ。例の大紙入の半紙に包んで、

「喜多、汝も一ツ取つて置かつし、此の人の口から、何と友白髪は嬉しからう。」喜多も袂に藏つたが、函嶺を立つて、小田原に引返し、道を轉じて吉浦、吉濱を越えて熱海の温泉、こゝで三日ばかり逗留して、歸りは三島越で、東海道へ出やうと、日金、十國を上に見望み、大島伊豆の島々をあとに、峠で富士へルビとさしむかひ、葎山を遙に瞰下しながら、臺場に着くと、こゝから汽車。

待合のお茶屋で、晝酒に酔が廻り、喜多八大にいきり出して、鳥打帽の下に向う顛巻、此の汽車を横ツ飛びに東海道線三島發に乗換へた。

「ヤあ、いかいこと詰込んだい。」と紳士夫人方の前も憚らず、大聲に、呆れたやうな顔をする、背

後から肩を叩いて、

「しばらく、」といふ者あり。これはと見ると、二十五ばかりの少紳士、新調の洋服しツくりと、清せい二鶴くつるに似て、其の嘴のやうな細身の杖ほそみ ステッキをついたのを、きよとりと見て、

「呀、見違へた、」新學士、暮に結婚をした好男子であつた。喜多、

「おや／＼おや、」學士、

「何うも申譯がありません。」喜多、

「一所か。」學士、

「なあに。」喜多、

「嘘を吐け。」學士、

「眞個だよ。」喜多四邊をニはすと、美たるも、艶なるも、窈窕たるも、婀娜たるも、瘦せたのも、肥つたのも、色の黒いのも、毛の縮れたのも、足袋ふとの汚いのも、襟に手巾を巻いたのも、0皆主あつて、二人づゝ丁ど帳尻があつて、此の人、一人、入込の大人數に席もたくイめり。喜多、

「そして何處へ。」學士、

「鈴川へ。」喜多、

「先へ行つてるのか。」學士莞爾として、

「未だ審ならず。」といふ。

「暮の忙しさと、遁げ出したのと、明けて未だ間がないのでお祝も申さぬ。甚だ不念。」といひながら、不圖氣の着いたのが函嶺以来の葱であつた。贈つて以て、喜多、

「さあ御祝儀の友白髪。」學士、杖を小脇に、美人が董を摘んだる態度で、帽のふち深く、涼い品のある目でじつと見て、

「難有う。」乗合の中で一人拍手をしたものがある。即 是彌次郎兵衛。

それよりして、奇妙喜多八の聲を絶たず、もの不思議ぢやないか、今年は南瓜など、繰返して、己も負けるものか、東京へ歸るまでに、一番此の友白髪を使ひ活かして見せると、信玄袋を叩いたが、五日、駿州 久能山の奇勝を見た時であつた。彌次、

「さあ、喜多八、目をまはすだ、いよ／＼久能山だ。何うだ 驚いたらう、未だ汝が喜ぶものが澤山ある。此處は氣候が暖いから大根が名物、しらすばし、疊翳が名代よ。いづれも情婦見へルビ》たやうな氣がするだらう、しかし支度は下山の時としよう、恰も仙人雲に入るの〇形で上るのだから、身が

重くツちやあ上られねえ。」

いかにも一山天を支へて、人は蟻の如く、石段は階子に似て雲に入り、中空を刻んで白き虹の立つたる如し。茶屋の亭主、

「えゝ、お支度は。」彌次、

「歸りにしやす。」亭主、

「然やうたら御参詣なさりませい、お草履を差上げます、でお召かへたさりませ。然やういたしませんと、お下駄でござりましては、御参〇詣御難儀でげす。」彌次、

「知つて居やす」亭主、

「扱、えゝ、お供物代をお取次ぎいたします、一等二等とあひなつて居りますので、二等にいたしますると、二十五錢、一等五十錢をお納めなされますれば、手前どもお受取を差上げまして、伊豆屋清兵衛、仕切判を押しまして、其をば男どもに持参いたさせ、お供申させますので、神官の事務所をさして差出しますれば、奥の院御参詣が叶ひまする上に、御神前に置きまして、お土器を下されます。其お土器は葵の御紋つき、これはお持歸りに成りまして宜しう。」彌次、

「分つて居やす。」亭主、

「扱其の上に又軸物を一卷お頂きにあひ成ります儀で、これは、臘塗の軸、えゝ、矢張其の葵の御紋つきで、日光から参りまするもので、手前懇意にいたしまする表具屋の話にいたしますると、表装ばかりでも五十銭はかゝりますると申します。即ち御先祖様御訓戒の御文章にござりまして。」彌次、「存て居やす。」と少し焦れ込む。亭主金の入齒をした口を閉ぢて、中腰の膝をついた顔を仰向けざまに目を眠つて、

「えゝ、」といつて暗誦する。馴れたもので、「扱、人の一生は重荷を負ふて遠き道を行く如し、急ぐべからず。不自由を常と思へば、不足なし、心に望おこらば困窮したる時を思出すべし、堪忍は〇無事長久の基、怒は敵と思へ、勝つ事ばかり知つて負くる事を知らざれば、害其身にいたる、己を責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるよりはまされり。」

慶長は八年度にござりますな、慶長八年一〇月十五日、権現様お書判が据りました、御歌がござりまする。

人はたゞ身のほどを知れ草の葉の

露も重きは落つるものかな彌次、

「心得て居やす。」〇亭主、

「え、何方になさいまする、二等はお神酒頂戴ばかりでげす。」喜多、

「及ばざるは過ぎたるよりはまされりとサ、彌次さん一歩になさい。」彌次、

「吝な事をいふな、」と二歩出して、

「アイ頼んます、金齒は癩だが、何も権現様は御存じないわさ。」

凡て〇亭主の言の如くにして参詣濟む、〇彌次、
「何うだ喜多八、唯恐入つたものだらう、日光が

櫻なら、此處は梅だ、實のある靈廟ぢやあねえか。」
喜多、

「そりや言ふまでもありませんが、まあそれより御覽なさい、苫屋の屋根が遙か目の下に三ツ五ツ七ツなど碁盤の目のやうに、白砂の濱に並んで、何うだらう、海の蒼さ、たゞ漣の揺れるやうな〇汀に、ちらほら小松原の中を、鹽汲が、漂ふやうな、足取で。」

彌次、

「絶景さな、あの霞の中が伊豆の岬だ。麓ぢやないか、正月の五日といふのに、茶屋に外套を脱いで来て、しんみりとした汗になつた。何うだ、此處は一合谷といつて、油を一合沸立たせて、とろ／＼とかけるだけで、敵の先陣は微塵に出来る、甲〇陽の〇軍師山本勘助がいつた處だ。」と背中を見るが如く石段の下を瞰下ろす、弓形に〇曲つた中段の虚へ、ほつほつ、奥山〇椿がこぼれたかと、友禪と緋縮緬、片褙を端折つて三人づれ、一人の案内を連れて、はう／＼上つて来た。

「近づくまゝに、彌次郎、其の三人の中にも一人、服装も容色も水際立つた夜會結びの貴夫人を一目見ると、顔の色を變へて、

「南無〇三寶、悪いものが見えたわい。」喜多、何處の奥方です。」彌次、

「馬鹿を言へ、新橋々々。」喜多、

「彼が、はてな。」彌次、

「いや、こりやならぬぞ、豆腐を切立てたやうた一方口の此の山だ、遁げも隠れもたることではない、南無三、もう其處へ、こりやかなはぬ」喜多、

「江戸ツ子の癖に何をそんなに。」彌次、
「それ大磯にごぎる将棋の御前の例の物さ、いづ
れ、ねだり込んで遊山と洒落たに相違ねえが、いづ
れもへも此の春は病氣だけれど、件の殿様には尚以
て彌次郎大病、〇舊冬より疝氣差込みの己だ、弱つ
たな。」と天窓を抱へる。今の彌次郎は将棋の上手、
手足を一ツづゝ八方へ引張らるゝ、煩はしさを病氣
と避けて、〇遠く伸した遊山の次第、大磯におはし
ます何某の御前は、素人離れのしたゞけに大の将棋
好。亡くなつた小さんが十八番の将棋の殿様を渾名
に呼ぶまで、太平の折からなり、一番乗の一番首よ
り、彌次が坊主頭を壓へるのを、〇畢世の功名と、
寝ても覚めても忘れぬ執心、其の人お傍去らずの婦
人、見つかつては、親の敵ほどに遁しはしまい。
婀娜な聲で、

「おや、先生。」彌次、

「平に、平にお見遁し、手前貴女を命の親と心得
る、先づ以て新年お目出たう。」と、しどろに狼狽
る。美人も豫て心得たといふ顔して打笑み、

「皆がおもりに困るんですよ、私も遊びサ、武士
は相身互、見遁がして上げますよ、ほゝほゝ。」彌

次郎^{らう} 吻^{ぼつ}と呼吸^{いき}をして、

「先^まづ安心^{あんしん}、是^{これ}で可^{よし}、奇妙^{きめう}喜多^{きだ}八^だ」といひかけて心着^{こころづ}いたらしく、急^{いそ}いで一信^{いっしん}玄^{げん}ルビしんげん^{げん}袋^{ぶくろ}から取出^{とりだ}した一件^{いっけん}もの。彌次^{やじ}大得意^{だいたく}で、

「え、お禮^{れい}に何か進^{しん}じたいでえすが、途^と中^{ちゆう}のこ
と、爰^{こゝ}に新春^{しんしゆん}の御祝儀^{ごしうぎ}を申上^{まをしあ}げやう。「きやしやな
なめし革^がの手袋^{てぶくろ}のさきで、いとらしく挿^{はさ}んで見^みて、

「何^{なん}んです、先^{せん}生^{せい}。」彌次^{やじ}、

「函嶺^{はこね}の土産^{みやげ}で友白髪^{ともしら}が、は、は、は、幾久^{いくひさ}しく。」

と笑^{わら}つて昂然^{かうぜん}として、ものをいふ目で、

「何^どうだ喜多^た八^だ、奇妙^{きめう}喜多^{きだ}八^だ。」

「御緩^{ごゆつく}り御參詣^{ごさんけい}」と彌次郎^{やじらう} 〇揚々^{やうく}として坂^{さか}を下^おり
むとするまで、黙^{だま}つて友白髪^{ともしら}を視^{なが}めた美人^{びじん}嬌瞋^{けうしん}を發^{はつ}
して、

「先^{せん}生^{せい}。」彌次^{やじ}、

「や。」美人^{びじん}、

「御前^{ごぜん}が白髪^{しら}だと思^{おも}つて、厭^{いや}ですよ私^{わたし}を、こんな
人^{ひと}の悪^{わる}いことをなさるなら、もう堪忍^{かんにん}して上^あげませ
ん。」彌次^{やじ}、

「え、美人^{びじん}、

「引張^{ひっぱ}つて歸^{かへ}るから可^い、否^{いえ}、何^どうせ無理^{むり}に願^{むが}つて

遊びあそびに來きたんです、御機嫌ごきげんの悪いわるのは知しれて居をます
からね、先生せんせいさい連つれて行いきや、どんなにお喜よろこびだ
か知しれないんです。」

彌次やじ、

「これは！」美人びじん、

「誰だれか一人ひとり附ついておいで、遁にがしちやなりませんよ。
身代みがはりよりも大事だいじな方かただから、」彌次やじ蒼あをくなつて、

「助たすけてくれ、喜多八きだ、喜多八きだ。」

【完】

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*